

# ループリック評価から得た介護実習における学生の成長分析の試行

## A Trial of Student Growth Analysis in a Care Work Practicum Obtained through Rubric Evaluation

鷲尾 敦 福田 洋子

Atsushi Washio Yoko Fukuda

野呂 健一 審來 敬章

Kenichi Noro Takaaki Horai

### (要約)

介護実習評価の改善を目指して介護実習用のループリックの開発を進めている。これまでに2017年度入学生の実習Ⅲ、2018年度入学生の実習Ⅱ、実習Ⅲ、2019年度入学生的の実習Ⅰ、実習Ⅱにおいて開発したループリックを用いて評価を実施してきた。この評価データを分析することにより、評価対象の違い、実習段階の違いを踏まえ、学生の成長、学年の特徴がどの評価指標に見られるのか、日本人学生と留学生で実習状況にどのような違いがあるか、そもそも学生に評価能力はあるのか、指導者は学生のどこに着目して評価しているのかを検証した。その結果、学生の強みや成長の様子、日本人学生と留学生の実習状況の特徴、学生の評価能力、指導者の評価時の着目点を見える化することができた。

### (キーワード)

介護実習、実習評価、ループリック、形成的評価

## 1. はじめに

### 1. 1 本研究の経緯と目的

執筆メンバーで構成している本学高等教育研究会では、2016（平成28）年から介護福祉士養成課程における介護実習の評価の改善を目指してループリックの開発に着手した。最初は、介護実習における「積極性」「協調性」などの汎用的能力の評価に着目したループリックから開発を進めた。2017（平成29）年は、評価項目ごとに複数の評価指標を設け、それぞれ3つの基準を記述語で示し、5点・3点・1点の得点を配した。従来の評価票は改訂をしたが、学生の評価点をつけるにあたって利用を継続したため、評価票に示されている「評価の着眼点」ごとに集計できるよう指標の得点を着眼点ごとに集計できる形式とした。2018（平成30）年は、介護技術などの専門的指標を加えたループリックの改善を進めた。実習指導者に意見を頂き、誤解しないような表現や判断に困らないような表現に修正を加えた。評価項目が多いためA3用紙で作成していたが、取り扱い易いようA4サイズ横置きのブック型に改善した。2019（令和元）年は、評価大項目5領域、評価項目16項目、評価着眼点25項目、評価指標65項目を整備し、着眼点ごとに集計するのをやめ、その代わりコメントを記録できるようにした。また、厚生労働省が示す「実習Ⅰ」「実習Ⅱ」の両方で使えるように評価指標は全て示し、各実習の段階で評価しない指標に斜線をひいた。現段階で79評価指標となった。実習後に指導者がつけたループリックと総合評価の両方を学生に示していたが、総合評価に目がいって個々の評価指標の結果をしっかり見ない学生が一部いたため、学生が指導者の総合評価が見られないようループリックと総合評価を分けた。2020（令和

2) 年は、将来の目標として介護福祉士が目指すべき基準を掲載し、卒業後の目標レベルの見える化を図るとともに、実習の基準としての目標と将来の目標を明確に切り分けた。さらに、評価点の2点・4点の評価基準がわかりにくいとの指摘を受けたことから、ガイドラインを作成し、評価点の1点から5点の各段階の学生のパフォーマンスがイメージできるように工夫した。

このように、介護実習での、施設指導者や学生が評価できるループリックの開発を進め、2017年度入学生が2年次の「介護実習Ⅲ」(2018年9月)で初めてループリック評価を実施した。そして、これまでに2018年度入学生の2019年3月の「介護実習Ⅱ」、2019年度入学生の2019年8月の「介護実習Ⅰ」のそれぞれの実習評価の状況について報告をしてきた。これらの評価によりもともとの課題であった実習評価の改善が進むと同時に、評価に使ったデータ分析から、本学学生の実習時の状況や留学生の特徴など、指導に連動する状況を分析した。

今回の報告は、新たに2018年度入学生が2019年9月に実施した「介護実習Ⅲ」と2019年度入学生が2019年3月に実施した「介護実習Ⅱ」のループリック評価を加えた分析である。以前の状況にこの新しいデータを加え、各実習時の特徴や学年の傾向などを拾いだすと同時に、本介護実習ループリック評価から学生指導のために得られる有効な情報は何かを検討する。まだループリックの開発は途上ではあるが、評価データの分析によって学生指導にフィードバックしていくための分析データの活用方法や分析の視点など検討を加えていく。

## 1. 2 介護実習の評価の動向

近年、高等教育においてループリックを用いた評価は広く実践されるようになってきた。ループリックは、授業において設定した目標や課題、達成状況等を学習者と授業担当者の相互で確認できる有効なツールの一つとして使用されている。本研究で主に着目するのは介護実習であり、通常の授業とは大きく異なる性質を持つ。一定期間、学生が学外で経験する実習での学びをループリックで評価するということは、実習生である学生と単位認定に係る評価権者である授業担当者に加えて、実習先の施設指導者もループリックを用いて具体的な評価をすることが必要となる。

そもそも、「実習を評価する」ということは、多くの課題や困難さを含んでいる。学生にとっては実習先での自分の言動がどのように評価されるか曖昧なだけでなく、臨機応変な対応が求められることの課題は、津田（2009）や工藤ら（2015）らが指摘している。そして、ループリックを用いた介護実習の評価については、数多く研究蓄積があるというものではない。宮本ら（2017）らが検討しているように、介護福祉士として求められる資質・能力は必ずしも数値で評価できるものではない。また、実習での学生個々の学びは現場の文脈や環境に多分に依存してしまうことや、実習評価は施設指導者の主観が大きく作用する可能性があることは、論を俟たないことでもある。しかしながら、柊崎ら（2018）や林ら（2017）のように、介護実習の評価にループリックを用いた研究も少なからず確認できる。これらは、実習の課題に関するループリックの評価やループリックで作成した項目と実習での学びの内容の整合性を議論しているものである。そのような介護実習をめぐるループリック評価の分野において、本研究は、施設関係者と協働で作成したループリックを用いて、本研究会の複数年の活動を踏まえ学生の学びのプロセスや評価者の視点と関連付けながら分析している点に意義がある。

## 2. これまでの実習評価の状況

### 2. 1 介護実習Ⅲ（2018年9月実施）での実習評価 ※キャリア研究センター紀要第5号

開発ループリックを、学生（2017年度入学生）による自己評価と実習先指導者による評価に用い、その結果から、それぞれの評価の傾向や特徴、違いなどを分析した。その結果、自己評価、施設指導者による評価（以下、施設評価）とも留学生のほうが日本人よりも高い傾向が見られた。学生評価と施設評価を比べると、日本人では差がほとんどなかったのに対し、留学生では自己評価がやや高い傾向が見られた。自己評価と施設評価には、特に日本人の場合、強い相関があった。また、日本人、留学生ともに「協調性」「守秘義務」「礼儀」「健康管理」の評価が高い一方で、「記録」「コミュニケーション」で弱点が見られた。

実習施設指導者に対するアンケート調査の結果、ループリック評価について概ね評価しやすいとの回答であったが、留学生の評価についてはほとんどが難しさを感じていた。学生アンケートでも、従来の評価より自己評価がしやすいという回答が多かった。また、ループリック評価に対する不平感は見られず、施設評価について思ったよりも良かったと好意的に受け入れていることが分かった。

実習施設指導者4名に対するインタビュー調査からは、評価観点が明示されたことにより、実習指導者の暗黙知だけによる評価を防ぐことができること、ループリック導入によって、実習指導者が自らの評価の方法について自己評価する機会になったことが窺える。

### 2. 2 介護実習Ⅱ（2019年2～3月実施）での実習評価 ※高田短期大学紀要第38号

2018年9月実施の介護実習Ⅲ（2018年度入学生）では、評価の着眼点ごとに平均した点数を表記する形式であったが、今回は評価着眼点ごとに学生や指導者がコメントを書ける書式へと変更した。

分析の結果、自己評価は留学生の方が高いが、施設評価では日本人と留学生の間に差はなかった。日本人は自己評価と施設評価に相関が見られるのに対し、留学生では相関がなく自己評価が上回っていた。

また、「実習態度」は高評価であるが、「積極性」「職員との意思疎通」が課題であり、加えて日本人学生は「施設理解」が、留学生は「振り返り」や評価力が低いことが課題であった。

### 2. 3 介護実習Ⅰ（2019年8月実施）での実習評価 ※キャリア研究センター紀要第6号

介護実習ⅡとⅢは実習施設種別が同じであるため同じ内容のループリックを使用したが、介護実習Ⅰ（2019年度入学生）は対象施設や実習目標が異なるため評価しない指標があった。それらの指標を削除せず斜線を引き次の実習以降で達成すべき目標が見えるようにするとともに、介護実習で達成すべき目標として新たな評価指標を追加した。

学生の自己評価は日本人と留学生でほぼ変わらず、施設評価は若干留学生が高い結果であった。それまでの調査では留学生のほうが非常に高い傾向があった自己評価について、今回は異なる結果となった。自己評価と施設評価との相関を見ると、日本人、留学生とも相関のある学生の割合が以前の調査に比べ少なくなる一方、相関のない学生が増えている。入学して4ヶ月後の実習ということもあり、評価指標及び評価基準に対する理解が低いことが要因であると考えられる。

領域別では、日本人も留学生も「実習態度」の評価が最も高かった。一方、最も低い評価領域は、施設評価では「コミュニケーション」であり、自己評価では「施設理解」であった。

### 3. ルーブリック評価から見た学生の傾向（2018年度生と2019年度生の評価結果）

#### 3. 1 全体像（領域別集計）

開発したルーブリック評価の観点には5つの「領域」があり、その下層に「評価項目」、さらにその下層に「評価の着眼点」があり、その下にそれぞれに1つないし複数の「評価指標」を設定している。

2018年度生の2019年3月の介護実習Ⅱと2019年9月の介護実習Ⅲの領域別集計結果と2019年度生の2019年8月の介護実習Ⅰと2020年3月の介護実習Ⅱの「領域」別の集計結果を表1に示す。この結果を見ると、①施設評価も自己評価も実習態度が大変良い評価であることがわかる。また、②留学生と日本人を比べると、2018年度は留学生の自己評価が大変高い傾向にある。2019年生については、実習Ⅰでは差はないが、実習Ⅱでは留学生の自己評価が高くなっている。③学生も施設指導者も「施設理解」の評価が大変低い傾向にある。また、2019年度学生は、「コミュニケーション」も低い。④一方で、2019年度学生の実習Ⅱ、2018年度学生の実習Ⅲでは、留学生の施設評価が若干高くなっている。実習を重ねるごとに留学生の評価が高まっている傾向にあるといえる。⑤日本人学生の自己評価は低い傾向にあるが、2018年度学生の実習Ⅲでは、実習Ⅱよりどの項目も高くなっている。それは実習指導者も同じである。一方2019年度の実習Ⅰと実習Ⅱでは、自己評価は下がっており、まだまだ自信がついていない状況が見て取れる。施設評価も伸びてはいないが、2018年度学生のように実習Ⅲで伸びる可能性があり、次の実習評価の結果が待たれるところである。

表1 2019年度生と2018年度生の自己評価と施設指導者評価の領域別集計の比較

大領域	2019年度生				2018年度生				
	実習Ⅰ(2019.8)		実習Ⅱ(2020.3)		実習Ⅱ(2019.3)		実習Ⅲ(2019.9)		
	日本人	留学生	日本人	留学生	日本人	留学生	日本人	留学生	
自己評価	実習態度	4.24	4.11	4.22	4.30	4.11	4.60	4.41	4.43
	自己目標	3.92	3.83	3.92	4.35	3.70	4.57	4.14	4.45
	コミュニケーション	3.64	3.65	3.61	4.22	3.69	4.29	4.00	4.34
	介護活動	3.78	3.77	3.50	4.09	3.66	4.24	3.94	4.29
	施設理解	3.42	3.57	3.55	3.87	3.53	4.39	3.78	3.84
	総合	3.89	3.87	3.74	4.20	3.79	4.40	4.03	4.33
施設評価	実習態度	4.35	4.53	4.41	4.36	4.25	4.20	4.31	4.47
	自己目標	3.88	4.11	3.88	4.06	3.87	3.43	4.11	4.14
	コミュニケーション	3.29	3.39	3.42	3.94	3.87	3.89	3.77	3.91
	介護活動	3.66	3.84	3.64	3.97	3.84	3.79	3.91	4.20
	施設理解	3.44	3.51	3.38	3.63	3.50	3.75	3.58	3.54
	総合	3.83	4.02	3.79	4.05	3.94	3.88	4.04	4.22

#### 3. 2 実習態度

3. 1の領域別集計で自己評価、施設評価とともに高い「実習態度」の領域を5つの評価項目別に集計した結果を表2に示す。①評価結果の高い「実習態度」領域の中で、唯一「積極性」が日本人学生、留学生ともに、自己評価や施設評価が低い評価項目である。2017年度生の実習評価も同じ傾向であった。

②「積極性」は低い評価ではあるが、留学生は自己評価、施設評価ともに日本人学生より若干高い傾向にある。③「礼儀」「健康管理」は自己評価、施設評価ともに特に高い評価項目である。④2018年度留学生は、実習Ⅱは特に高い自己評価であったが、実習Ⅲでは落ち着いた値となり施設評価と同じ程度に高い評価であった。⑤2019年度留学生は、実習Ⅰに比べ実習Ⅱでは自己評価が高くなっている。⑥2019年度の実習Ⅰの施設評価は、留学生の自己評価よりも高い傾向にあり、中でも「健康管理」が高かった。

表2 2019年度生と2018年度生の自己評価と施設指導者評価の「実習態度」領域の比較

実習態度 の 評価項目	2019年度生				2018年度生				
	実習Ⅰ(2019.8)		実習Ⅱ(2020.3)		実習Ⅱ(2019.3)		実習Ⅲ(2019.9)		
	日本人	留学生	日本人	留学生	日本人	留学生	日本人	留学生	
自己評価	積極性	3.56	3.79	3.68	4.26	3.31	4.19	3.68	4.06
	協調性	4.20	4.08	4.17	4.27	4.00	4.50	4.27	4.43
	守秘義務	4.12	4.03	4.31	4.47	4.52	4.90	4.33	4.57
	礼儀	4.85	4.38	4.43	4.52	4.78	4.89	4.82	4.77
	健康管理	4.46	4.26	4.88	4.53	4.78	5.00	4.72	4.64
	実習態度全体	4.24	4.11	4.22	4.30	4.11	4.60	4.41	4.43
施設評価	積極性	3.62	3.95	3.60	3.91	3.70	3.55	3.75	4.00
	協調性	4.18	4.47	4.48	4.58	4.28	4.18	4.36	4.57
	守秘義務	4.46	4.53	4.44	4.31	4.28	4.24	4.28	4.64
	礼儀	4.80	4.72	4.55	4.60	4.67	4.86	4.89	4.80
	健康管理	4.69	4.97	4.67	4.68	4.92	4.86	4.94	4.64
	実習態度全体	4.35	4.53	4.41	4.36	4.25	4.20	4.31	4.47

### 3. 3 介護活動

次に「介護活動」領域の評価結果を表3に示す。①2018年度の留学生は、実習Ⅱの自己評価は高いが項目によっては低めのものもあった。しかし、実習Ⅲではどの項目も高い評価であった。②2019年度留学生は、実習Ⅰの自己評価が日本人学生よりも低かったが、実習Ⅱでは日本人学生よりも高くなった。③留学生に対する施設指導者の評価は、2018年度は実習Ⅱよりも実習Ⅲが、2019年度は実習Ⅰよりも実習Ⅱが大変高い評価となっており、学生の成長が目立っている様子が伺える。④日本人学生の指導者による評価も、いずれも次の実習の方が高い評価を得ているが、留学生ほどの伸びはなかった。⑤日本人学生は、「記録」について自己評価が特に低いが、施設指導者からの評価は低いながらもそこまで低くはない。日本人学生が「記録」を苦手と考えていることが推測される。2018年度学生の実習Ⅲでは、自己評価も施設評価も多少上がっているので、2019年度学生についても実習Ⅲでの伸びが期待できるかもしれない。⑥「報告」は、日本人学生も留学生も後の実習の施設評価が高くなっている。中でも、留学生に対する施設評価が高くなっている。実習の経験によって正しい「報告」ができるようになっていると思われる。⑦「受け持ち利用者理解」は、留学生の方が施設評価が高くなっている。この評価項目は、「観察」と同様、2019年度の実習Ⅰから実習Ⅱにかけての伸びが自己評価も施設評価も若干あるが、2018年度生の実習Ⅱから実習Ⅲにかけては伸びがない。

表3 2019年度生と2018年度生の自己評価と施設指導者評価の「介護活動」領域の比較

介護活動 の 評価項目	2019年度生				2018年度生				
	実習Ⅰ(2019.8)		実習Ⅱ(2020.3)		実習Ⅲ(2019.3)		実習Ⅳ(2019.9)		
	日本人	留学生	日本人	留学生	日本人	留学生	日本人	留学生	
自己評価	(受け持ち)利用者理解	3.43	3.60	3.63	4.20	3.92	4.50	4.01	4.38
	生活支援技術	3.95	3.77	3.59	4.17	3.65	4.14	3.89	4.22
	福祉用具の適切な使用	4.08	3.95	3.75	3.94	3.89	4.57	4.22	4.14
	受け持ち利用者の介護過程の展開			3.36	3.97	3.65	3.96	4.17	4.12
	観察	3.92	3.97	3.92	4.06	3.83	4.21	4.06	4.43
	記録	3.38	3.56	3.15	3.86	3.41	4.26	3.89	4.27
	報告	3.92	3.79	3.42	4.21	3.63	4.52	3.85	4.52
施設評価	(受け持ち)利用者理解	3.12	3.41	3.59	3.71	3.86	4.04	3.88	4.16
	生活支援技術	4.00	4.18	3.60	4.13	3.72	3.58	3.83	4.14
	福祉用具の適切な使用	3.85	4.00	3.58	4.44	4.11	4.00	4.11	4.00
	受け持ち利用者の介護過程の展開			3.40	4.07	3.87	3.71	3.89	4.26
	観察	3.65	4.04	3.92	4.32	4.17	3.86	4.00	4.21
	記録	3.63	3.57	3.68	3.64	3.76	3.83	3.97	4.19
	報告	3.72	3.84	4.14	4.40	3.87	3.86	4.15	4.38

## 3. 4 コミュニケーション

「コミュニケーション」領域の評価結果を表4に示す。①「利用者との意思疎通」に比べ「職員との意思疎通」の評価については、施設評価が低い傾向にある。唯一2019年度の実習Ⅱの留学生は、他に比べ高い。②自己評価から、実習を重ねるにしたがって、留学生は「利用者との意思疎通が図れる」ようになっていると考えられる。一方、施設評価も2019年度は実習Ⅰよりも実習Ⅱが高く、2018年度の実習Ⅱ、実習Ⅲでは評価は高い。③日本人学生は、「利用者との意思疎通」に対しては、2019年度学生の実習Ⅰ、実習Ⅱとともに、自己評価も施設評価も変化はない。2018年度学生については、施設評価は下がっているが、自己評価は若干上がっている。④「職員との意思疎通」について、日本人学生は自己評価も施設評価も低く、苦手意識があるのか評価は伸びていない。⑤留学生の「職員との意思疎通」は、実習を重ねることで施設評価はいずれも上がっている。2018年度学生の実習Ⅱと実習Ⅲの自己評価には変化はないが、高い自己評価であった。

表4 2019年度生と2018年度生の自己評価と施設指導者評価の「コミュニケーション」領域の比較

コミュニケーション領域 の 評価の着眼点	2019年度生				2018年度生				
	実習Ⅰ(2019.8)		実習Ⅱ(2020.3)		実習Ⅲ(2019.3)		実習Ⅳ(2019.9)		
	日本人	留学生	日本人	留学生	日本人	留学生	日本人	留学生	
自己評価	利用者との意思疎通が図れる	3.83	3.84	3.76	4.25	3.83	4.25	4.14	4.33
	職員との意思疎通が図れる	3.46	3.46	3.17	4.15	3.11	4.43	3.33	4.36
施設評価	利用者との意思疎通が図れる	3.58	3.79	3.56	3.95	3.92	4.00	3.89	3.95
	職員との意思疎通が図れる	3.00	3.00	3.00	3.91	3.67	3.43	3.44	3.79

#### 4. 学生の評価力

ループリックを使って学生は自己評価を行う。その自己評価がしっかりとつなされているかをここで検証する。実習Ⅰ, Ⅱ, Ⅲと実習が進むにつれ、学生は介護現場での動き方や実習個々の動きについての経験が重なり、理解力が高まっていく。また、学生は施設評価を見て、自分がどれくらいできていたのかできていなかつたのかを理解し、自己評価との差を見つめるなどの省察を行う。そういう実習の評価活動を繰り返していくことによって、学生自身の評価力が向上すると考えている。

##### 4. 1 学生の自己評価得点と指導者による評価得点

図1は、これまでの実習のループリック評価を学生ごとに、自己評価の全指標を単純平均した値の分布図である。図1の2017年度は、2017年度生が初めてループリックを使って評価を実施した時の分布図である。2018年度生は、実習Ⅱからループリックを使った評価活動を行い、2回経験した。2019年度生は実習Ⅰからループリックを使った評価を実施し、実習Ⅱまでの結果が図1に掲載されている。2020年度生の実習Ⅰと2019年度生の実習Ⅲのループリック評価は実施したばかりであり、これから分析する予定である。

図1を見ると、留学生は、日本人学生と比べると自己評価が高い傾向にある。特に2017年度、2018年度学生はその傾向が強い。しかし、2019年度学生にはそうでない学生もいる。2018年度学生の場合、日本人学生は次の実習で自己評価が高くなった学生が増えている。また、2019年度の留学生は、次の実習で自己評価が高い方向に移動しているが、日本人学生の中には、低いところに留まっている者が一定程度いる。

図2は、施設指導者によるループリック評価の全ての評価指標を個々の学生ごとに平均した得点の分布である。どの年度も指導者による評価が高い留学生が多く存在している。2018年度生の実習Ⅱから実習Ⅲへの変化を見ると、極端に評価が低い学生が少なくなり全体として高い評価に向かっている様子が見える。一方、評価が特に高かった日本人学生の数が減ったことが気になる。2019年度生の実習Ⅰと実習Ⅱを比べると留学生も日本人学生も低い層から高い層まで広く分布している。いずれも次の実習では高い方向に向かっているが、特に低い日本人学生がいたり、特に高い評価の留学生が少なくなったりしている。

##### 4. 2 学生の自己評価と施設指導者による評価の相関

個々の学生の評価とその学生を指導する施設指導者による評価との間の相関係数の分布を図3に示す。全実習を通して、日本人学生には指導者との相関が高い学生が多い。2017年度学生のまとめとなる実習Ⅲでの相関が高い日本人学生が多くあり、低い日本人学生であってもやや相関はあるという結果となった。それに比べ留学生ではやや相関があるものが半分程度で、残り半分程度は相関がなかった。この時は、ループリックに振り仮名を付けていなかったので、日本語能力の低い学生は評価そのものができていなかつたかもしれない。2018年度も同様の傾向があるが、日本人、留学生ともに実習Ⅱから実習Ⅲで相関が高い方向に分布している。しかし、一部日本人学生で相関がない学生がいた。2019年度の留学生は、実習Ⅰから相関がある留学生が一部あった。また、相関がない日本人学生が多くあった。実習Ⅰの評価は初めてだったので、前年度までの学生と比較はできないが、日本人であっても評価指標に記述

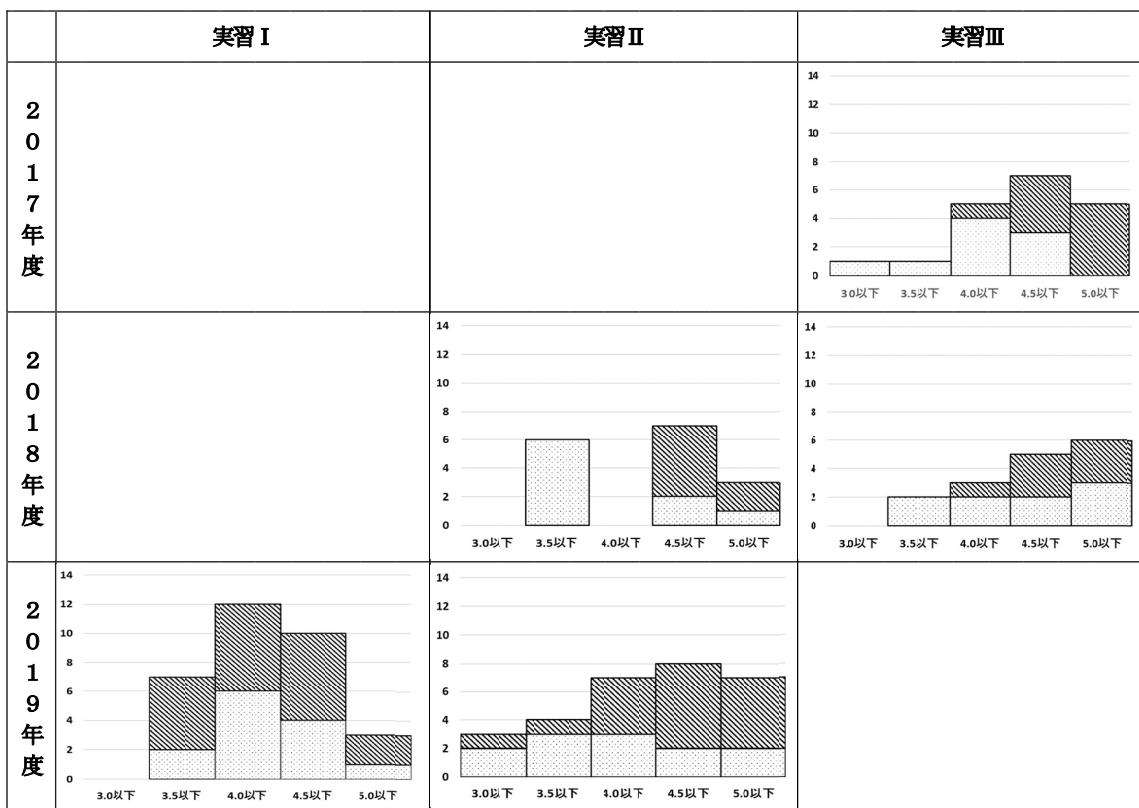


図1 学生の自己評価総平均の分布（□日本人学生 ■留学生）

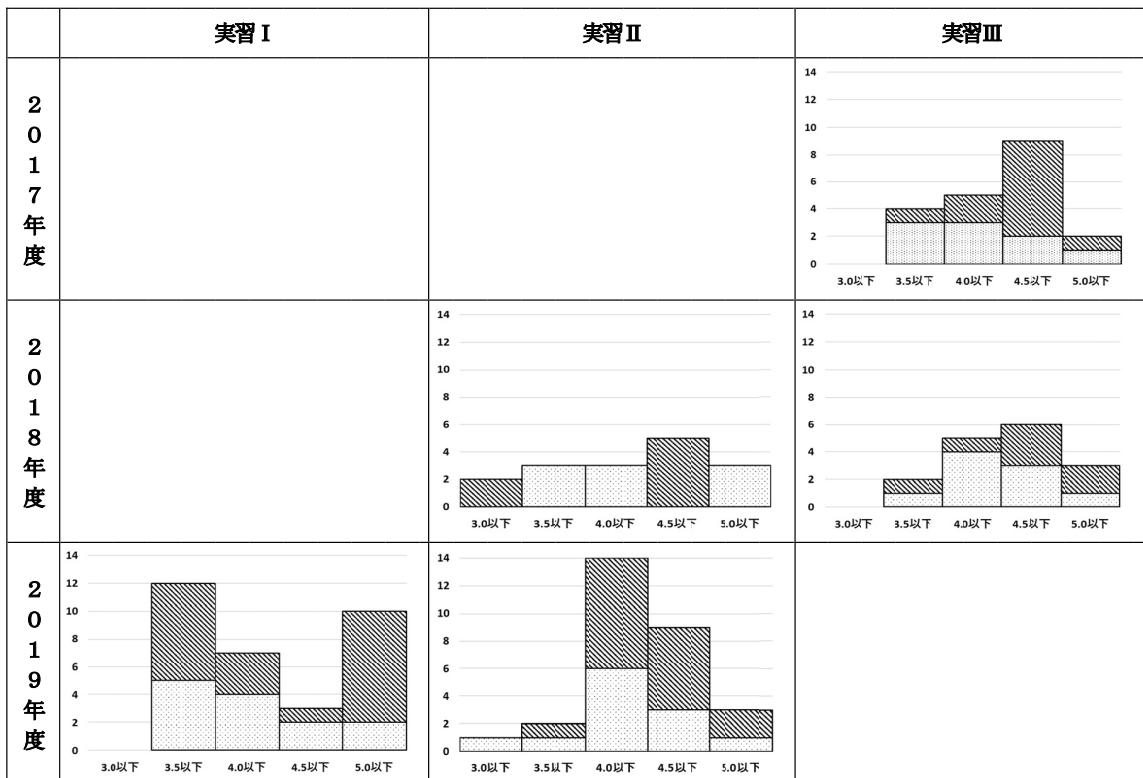


図2 施設指導者による評価総平均の分布（□日本人学生 ■留学生）

されている内容が求めていることの理解がまだ低いためと思われる。2019年度生も実習Ⅱになると、留学生も日本人もやや相関がある方向に分布が一部移動している。また、相関が高い学生が実習Ⅱにおいてもまだいない。実習Ⅲでどう変化するか気になるところである。

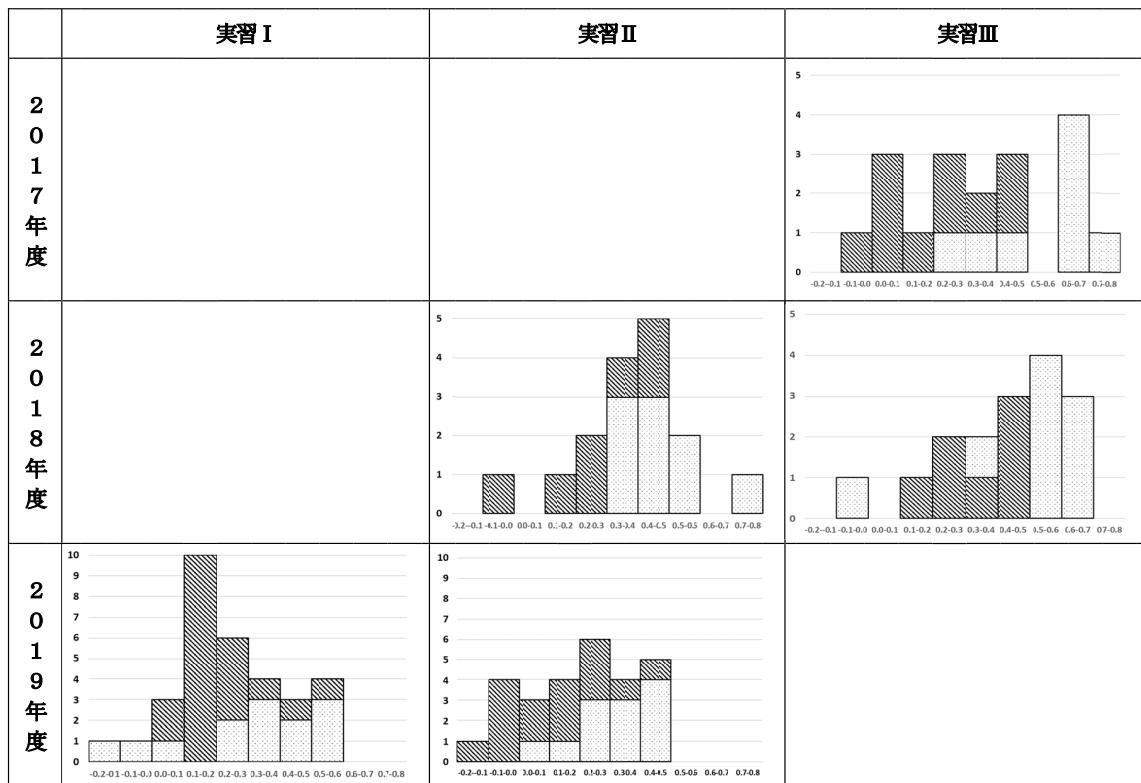


図3 学生自己評価と施設指導者による評価との相関係数の分布（□日本人学生 ▨留学生）

## 5. 指導者の総括評価を決定する評価指標

ループリック評価は、指標ごとに5段階で点数をつけています。当初は65指標あったが、執筆時現在79指標をおき、実習Ⅰでは評価していない指標が26指標ある。学生の実習における成績評価、いわゆる総括評価をつけるにあたっては、指標に重みをつけて合計するなどして求めることも可能であるが、そのようにはしていない。総括評価は、実習先から直接5段階で提出を求めている。たくさんある指標に得点を付け、それらを考慮しながら最終的な1つの数字に施設指導者は集約している。では、施設指導者は、どのような視点で総括評価を付けているのであろうか。

表5は、2019年度入学生の実習Ⅰと実習Ⅱにおいて、総括評価と相関が特に高かった評価指標の一覧である。表6は、特に相関がなかった評価指標の一覧である。

表6を見ると、実習Ⅰ、実習Ⅱともに「実習態度」との相関がない。これは、「実習態度」が「積極性」以外はとても高い傾向にあるため、全体の総括評価には影響がない。つまり、できていて当たり前といったところであろう。実習Ⅱでは「施設理解」領域の「施設理解」評価項目が挙がっているが、こちらは評価がとても低い項目であり、こちらも誰もができないため影響がなかったといえるだろう。

表5を見ると、実習Ⅰも実習Ⅱも「介護活動」領域の項目が多く挙がっている。総括においては、

「介護活動」が大きなウェイトを占めている。その中でも、「記録」「生活支援技術」などが実習Ⅰ、実習Ⅱの両方で相関の高い評価指標として挙がっている。また、実習Ⅰでは、「職員との意思疎通が図れる」という「コミュニケーション」が影響を与えていた。さらに実習Ⅱでは、「施設理解」領域の中の「組織の理解」評価項目の中の「職種間がどのように情報共有し、連携・協働しているのかを知っている」が挙がっているのが特徴的である。また、実習Ⅱでは、「実習態度」の中でも「積極性」の評価に高い相関が見られる。また、実習Ⅰでは、「自己目標」で「指導されたことを実践に生かすことができる」が挙がり、実習Ⅱでは、「自己目標」として「振り返り」の「興味や関心を持ったことや自分の意見を職員に伝え、実習内容を振り返ることができる」が挙がっている。また、実習Ⅰでは、「介護活動」の「受け持ち利用者理解」が挙がっていたが、実習Ⅱでは、理解の先にある「受け持ち利用者の介護過程の展開」の一つが一覧に挙がっており、実習段階に応じた指標に相関があることが窺える。

表5 2019年度学生に対する施設指導者による総括評価と相関の高い施設指導者評価の評価指標

実習Ⅰ					実習Ⅱ				
領域	評価項目	評価着眼点	評価指標	相関	領域	評価項目	評価着眼点	評価指標	相関
介護活動	生活支援技術	介護実習を通して、利用者の暮らしが理解できる	根拠に基づいた記録ができる	0.83	介護活動	受け持ち利用者の介護過程の展開	介護に必要な情報の収集ができる	利用者と関わりを持つ中で必要な情報を得ている	0.72
コミュニケーション	意思疎通を図る	職員との意思疎通が図れる	利用者のADL(日常生活動作)など生活能力や作業能力を理解している	0.83	介護活動	生活支援技術	個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できる	個別性に応じた介助を安全・安楽に行うことができる	0.69
介護活動	受け持ち利用者理解	利用者の生活が理解できる	指導者の指導のもとで介護技術を安全・安楽に実施できる	0.80	介護活動	生活支援技術	個別性に応じた移動・移乗の介助を安全・安楽に行うことができる	個別性に応じた移動・移乗の介助を安全・安楽に行うことができる	0.66
介護活動	受け持ち利用者理解	利用者の生活が理解できる	利用者の1日の生活を理解する	0.79	自己目標	目標設定・実践・振り返り	振り返り	興味や関心を持ったことや自分の意見を職員に伝え、実習内容を振り返ることができる	0.64
介護活動	生活支援技術	個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できる	個別性に応じた着脱・整容の介助を安全・安楽に行うことができる	0.78	介護活動	生活支援技術	個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できる	指導者の指導のもとで介護技術を安全・安楽に実施できる	0.63
介護活動	記録	介護場面を的確に表現できる	介護場面を的確に表現できる	0.78	施設理解	組織の理解	多職種の専門性を理解し、介護担当上の役割と専門職としての意識と情熱の意識がわかる	職場間がどのように情報共有し、連携・協働しているのかを知っている	0.63
介護活動	報告	利用者の変化や反応などを、報告を要する事項を判断し、報告できる	報告は適切な時間にメモを活用し、5W1H(いつ・どこで・誰が・何を・どのように)を明確にした内容である	0.78	介護活動	記録	介護場面を的確に表現できる	介護場面を的確に表現できる	0.62
自己目標	目標設定・実践・振り返り	自分の立案した目標に向かって実践できる	指導されたことを実践に生かすことができる	0.77	実習態度	積極性	意欲的に取り組む姿がみられる	多職種から得た情報を利用できる	0.61
介護活動	観察	介護場面を観察して、適切な反応や行動ができる	職員の介護場面を観察し、実践に移せる	0.77	介護活動	生活支援技術	介護実習を通して、利用者の暮らしが理解できる	介護実習を通して、利用者の暮らしが理解できる	0.61
介護活動	生活支援技術	個別性に応じた介助の必要性を理解して実施できる	利用者の安全で快適な生活環境を整える必要性が理解でき、実施できる	0.78					

表6 2019年度学生に対する施設指導者による総括評価と相関のない施設指導者評価の評価指標

実習Ⅰ					実習Ⅱ				
領域	評価項目	評価着眼点	評価指標	相関	領域	評価項目	評価着眼点	評価指標	相関
実習態度	健常管理	自分の健康に留意できる	体調管理ができ、欠席や早退がない	-0.01	施設理解	施設の理解	施設が地域で果たす役割や機能を実習日誌や訪問前記録等に詳しく記載している	実習先施設が地域で果たす役割や機能を実習日誌や訪問前記録等に詳しく記載している	-0.26
実習態度	礼儀	規則を守り礼儀正しく接遇できる	自己の所在を常に明らかにし、実習場所を離れる時は、職員の承認を得る	0.20	自己目標	目標設定・実践・振り返り	自分の立案した目標に向かって実践できる	毎日の目標を立てる	-0.12
実習態度	礼儀	規則を守り礼儀正しく接遇できる	運転や欠席をする場合は、実習先と学校に連絡する	0.24	実習態度	協調性	職員・利用者・実習生との協調性がある	周りの状況を考えて行動できる	-0.10
介護活動	生活支援技術	利用者のニーズに合ったクリエーション企画と実施ができる	レクリエーション企画を立て、実施できる	0.29	実習態度	守秘義務	利用者のプライバシー保護に配慮できる	私物に触れるときは、職員の指示のもと、利用者に了解を得る	-0.01
実習態度	守秘義務	利用者のプライバシー保護に配慮できる	私物に触れるときは、職員の指示のもと、利用者に了解を得る	0.30	実習態度	健常管理	自分の健康に留意できる	体調管理ができ、欠席や早退がない	-0.01
					実習態度	礼儀	規則を守り礼儀正しく接遇できる	運転や欠席をする場合は、実習先と学校に連絡する	-0.01
コミュニケーション	意思疎通を図る	利用者の意思疎通が図れる	いろいろな利用者と話す機会を自ら作ることができる	0.00	介護活動	介護活動	介護計画に則した介助の実践ができる	介護計画に則した的確な介護実践ができる	0.09
					実習態度	守秘義務	利用者のプライバシー保護に配慮できる	居室に入る時はノックをし、声かけをする	0.12

たくさん評価指標がある中で、各実習段階で重要視される部分に違いがあることがわかった。学生にも、実習の際、特に意識しておかなければならぬ点として、表5の評価指標を提示しておくことは有用ではないかと思われる。

## 6 考察

### 6. 1 まとめ

#### (1) 学生の強み、弱み、成長の様子

2018年度入学生と2019年度入学生的ループリックの自己評価と指導者による評価結果から、学生の様々な状況がわかつってきた。また、年度による違い、次の実習での評価結果の変化などに着目した。ループリックには5つの領域があり、さらにそれぞれに評価項目があつて、さらに評価の着眼点に分かれている。その着眼点の中に評価指標がある。

学生の状況として、「積極性」以外の「実習態度」が良く学生も自己認識していること、留学生の自己評価が高い傾向にあること、「施設理解」の評価そのものが難しい状況にあること、実習を重ねることで評価が良くなる傾向があり、それは特に留学生に顕著であることなどがわかつた。日本人学生の評価は留学生に比べ低い傾向にあるが、実習を繰り返す中で少しづつ評価が上がる可能性もあった。

「介護活動」を見ると、留学生に対する施設評価は、実習Iより実習II、実習IIより実習IIIの方が高くなつており、特に「報告」は顕著である。留学生が成長している状況が窺える。日本人学生は、「記録」に自信がない傾向が目立つてゐるが、実習を重ねることで施設指導者からの評価は若干高くなつてゐる。変化は留学生ほどではないが、実習IIIで変化する可能性がある。

「コミュニケーション」は、「利用者との意思疎通」はとれていますが、「職員との意思疎通」が難しいと学生も指導者も認識している。留学生は利用者及び職員との意思疎通は、実習を重ねることに自己評価が高くなつており、指導者も留学生の自己評価ほどではないが高く評価している。

以上のように、評価データを集計することで、学生の強み弱み、自己理解の様子、能力の伸びなどを把握することができる。

#### (2) 学生の評価力

学生の評価力については、評価得点の平均や指導者との相関をとることで、学生の評価力を確認することができたと考える。①留学生は自己評価が高い傾向にあるが、次第に落ち着き、施設評価との相関も実習を重ねることで向上していることがわかつた。日本人学生は相対的に評価を低くする傾向があつた。また、初回の実習では指導者との評価の相関がない学生もいたが、実習を重ねることで相関が高まつていく傾向にある。

#### (3) 指導者の見る目

指導者が総括評価するときに、各評価指標で評価した結果とどれだけ相関があるかを調べることによって、指導者が特に注意してみてる視点を確認することができたと考える。

指標は異なるが、評価領域や評価項目で「介護活動」の「生活支援技術」や「記録」が実習I、実習II両方で重要視された。一方で、実習Iと実習IIで異なるものがあつた。実習Iでは、「コミュニケ

ション」の「職員との意思疎通を図る」、「自己目標」の「指導されたことを実践に生かす」に対し、実習Ⅱでは、「自己目標」で実践の「振り返り」であったり、「実習態度」の「積極性」、そして、「組織の理解」の「職種間の連携」に関わる指標であった。これは実習の段階によって重視している点が異なるということである。

## 6. 2 課題

図2、図3を見てわかるように、2019年度学生の実習Ⅲのデータを分析して初めて、2年間の3回の実習を通して学生の成長の姿がわかる。今後は、実習を重ね、結果データを今までのデータと比較して今回の検証を進めていく。

また、ループリックの形がほぼ固まったが、来年度より三重県介護福祉協議会が編纂する「介護実習の手引き」にループリックを掲載する方向で検討が進められている。現在のループリックを他の養成校も使えるよう、より汎用的なものにするべくさらに改訂を加える予定である。そして、このループリックを指導のためにどう生かすべきか、そのためにどのような分析結果を出せばよいか、さらなる検討を進めていきたい。

## 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP19K02261 の助成を受けたものである。

## 参考文献

- ・工藤雄行、山口かおる（2015）「本学における介護自習評価の特徴と課題：実習施設評価と学生自己評価の比較を通して」『弘前医療福祉大学短期大学部紀要』第3号1巻、pp. 95-102.
- ・津田理恵子（2009）「介護福祉実習における養成校の課題—養成校教員と施設指導者の十種に関する調査結果から一」『厚生の指標』第56巻第5号、pp. 10-16.
- ・林和歌子、大内義広（2017）「ループリックを用いた介護実習評価法の開発」『城西国際大学紀要』第26巻、第3号、pp. 37-50.
- ・柊崎京子、松永美輝恵、宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子（2018）「介護実習の実習目標達成を支援するための取り組みと課題：「実習課題ループリック」の作成と活用結果から」『介護福祉学』25巻1号、pp. 1-10.
- ・福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷲尾敦（2019）「介護実習でのループリック評価の導入による効果と課題」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第5号、pp. 28-39.
- ・宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、重松義成、柊崎京子（2017）「初学習段階における「介護実習記録」を課題とするループリック評価の施策と活用」『帝京科学大学紀要』Vol. 13 pp. 77-86.
- ・鷲尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章（2020a）、「介護実習ループリック評価結果を用いた学生の実習分析」『高田短期大学紀要』第38号、pp. 23-34.
- ・鷲尾敦、福田洋子、野呂健一、寶來敬章（2020b）、「介護実習Ⅰのループリック評価の検証—3つの介護実習を通したループリックを目指して—」『高田短期大学キャリア研究センター紀要』第6号、pp. 28-39.